

道後上人坂

(小説「残りの坂」を改題補筆)

著者 青山 淳平

挿絵 柳田 補

発行所 社会思想社



その週末、万作は昔、郷土史家から教わった島へ出かけた。島は弓島という。

松山の隣町の海辺にある廃寺跡を調査していた時、その郷土史家が海上に浮かぶ綿くずのような島を指さしていった。

「あの島の盆踊りはちいと変わつとらい。タンタン、ヒョイツ、タンタン、ヒョイツ、と跳びはねるんぞな」

かれは、タンタン、ヒョイツ、のところで右足、次に左足とはねてみせ、「あの島は昔、機帆船の潮待ち港として賑わったところやから、外からいろんな連中が入りこんどる。ほかの島とはちいとちがうからの」と口元をゆるめ、万作に好色な視線を投げかけてきたものである。

四十分ほどで、渡海船はその弓島に着いた。

島の南はすべて港である。それも島に不釣り合いなほど立派で大きい。広い湾内に面した僅かばかりの平地には、ぎつしり二階家が建ち並んでいる。みんな潮風にさらされ廃屋のように古びているが、いずれも商人町の町屋の面影を残していて、厳しい労働と風雨を塗りこめた漁港のたたずまいと明らかに異なっていた。

島の人たちは、漁や海運で生計をたてるかたわら、二階に遊女の置き部屋をつくり、潮待ちで入港した船乗りたちの無聊ぶりようを慰めるのに一役買っていたのである。それは昭和の半ばごろまでの話で、いま島の人口は五十人にも満たないと船に乗りあわせた老女が万作に語ってくれた。

栈橋からふりかえると、朝たちこめていた海霧が晴れ、春のきらめく海が万作の目にまぶしい。

何かありそうな島だった。

万作は老女に教わったとおり、左右に壁のように家がつづく細い路地をたどった。風を通すためなのだろう。住人のいる家はどこも雨戸を戸袋にしまい、玄関は開けたままだった。路地から家の中をのぞくと、屋内の障子しょうじや襖ふすまも開いているので、うす暗い室内の向こうにきらきら光る海面が見える。山側の家はほとんどが空き家らしく、窓は堅く閉ざされていた。

島人はどこかに隠れてしまったのか。ひっそりとし、人の気配はまるでしない。磯の匂いのする風が路地をぬける。建ち並ぶ家並みの端で、万作は「岡地」の表札をみつけた。老女から聞いた島の総代の家である。

玄関へ入り、奥へ声をかける。青黒い畳にいたおうな 嫗が、のっそり身体を起こし、腰をかがめたまま万作の方へやってきた。万作はていねいに来意を話した。すると嫗は、主人は朝から漁に出ており、夕方にならないと帰らないという。万作はもう一度来ることを告げ、島内を歩いてみることにした。

周囲四キロほどの小島である。

路地を引き返し、廃屋の横の小道を小さな山へ上がる。途中、一度休んだだけですぐ山の上に出た。木の鳥居をくぐると簡素な造りの社殿があった。形どおり参拝し、周囲にばらばらと貧相な松が生えた境内を歩く。ここで、盆踊りをしているらしい。万作は境内の中をまるく二周しながら、島人たちが跳ね踊る様を思い描いたが、老人ばかりの盆踊りが想像され、いまひとつしっくりしないのだった。社殿の廊下に腰を落とし、島に残る踊り念仏の由来を推理した。どうやらそれは、島の遊女と関係がありそうだった。

「予州の窪寺」に似通った場所を探して、島を歩く。

びわやみかんの畑、それにわずかな水田に続く岬道に入る。

万作は旅人の顔になる。かれは南から東、東から北へと潮騒を遠く近くに聞きながら島を回った。

島の西で、万作はついにそれらしい場所を見つけた。

マガシやウゴキなど温帯海洋樹林の繁る岡の手前に荒れた畑があり、そこに石舞台のような巨岩が海を望んで居座っている。岡からゆるやかに傾斜した畑は岩のむこうで途切れ、後は急峻な崖になって海面に落ち込んでいた。

巨岩の上は平らで、家が一軒たつほどに広い。

自分ならここに閑室を構える、と万作はつぶやきながら岩の上によじ登った。

目をこらすと、海原へ錦繡きんしゅうをしきつめたような潮路が、細く長く南北に蛇行

しながら西へ西へとつづいていた。

ふと、「どこかで白道を見失ってしまった」という槇子の手紙の言葉が頭をもたげた。万作は岩に寝転び、目をとじた。

死を遠くへ押しやってしまった、という思いがしきりにこみあげてきた。

(わが屍は野に捨て、獣にほどこすべし)

一遍のすさまじい言葉にとらわれて、万作はいつまでも岩の上にいる。

日がかげり、膚寒くなった。

万作は島の南へ足を運んだ。

総代の家では、漁から帰った岡地老人が万作を待っていた。

意外にも奥座敷に通される。すぐによく冷えたビールがでた。皿に盛られた小いわしの酢物は今朝とったものだという。

岡地は話好きだった。万作が久しぶりの話し相手なのか、尋ねもしないのにかれは一杯船主として瀬戸内海を往来していたころの苦労話をひとしきりしためつたに聞けない、内海航路の機帆船の話だった。岡地は、夕食を用意したから食べていってくれという。それに差し支えないようだったら、泊まってもろたらええ、二階の部屋はもう何年も空いたままやから、と万作を誘うのだった。

海はすっかり暗くなっていた。座敷にまで潮騒がせまってくる。

万作は夕食を馳走になりながら、盆踊りのことを聞いた。すると岡地は、もうずっと前から踊りはできなくなつた、と酔いで赤く濁つた目をしばたいた。二十年ほど前まで島に残っていた踊り念仏は、万作が思っていたとおり、江戸の中ごろ京から渡ってきた遊女たちが伝えたものだった。遊女たちは顔に白粉をぬり、眉を青く描き、着物の裾をはだけながら跳ね、踊りながら念仏を唱えた。それは、時宗の踊り念仏というよりは、泊まり客目当ての風流踊りなのだという。ちなみに、遊女も島人も真宗の信徒であった。

引きとめられたが、万作は最終の船に乗った。

一遍についての収穫はなかったが、気持ちのいい取材旅行だった。潮焼けした岡地老人の人のいい顔と、泊まっていけばええと残念がる様子が目蓋に残った。老人の親切に甘えて、泊まってもよかつた、と万作は暗い海面を見つめながら少し悔いた。